

第 24 回国際動物行動学会議

1995年8月10～17日の間、ハワイ大学の後援による標記の会議が、ハワイ・ホノルルのハワイアン・リージェントホテルで開催される。

詳細連絡先は、Congress Secretariat, Suite 150, GPM Building, San Antonio, Texas 78216-5674.

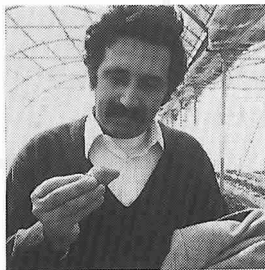
農水省畜産試験場の奥村隆史室長、 草地試験場に異動

1980年より14年間、ミツバチの研究に従事されていた奥村隆史室長は、1994年4月1日から草地試験場放牧利用部家畜害虫学研究室に異動された。後任に東北農業試験場畜産部の天野和宏氏が就任。スタッフは天野室長と木村澄主任研究官の2名。奥村隆史氏の実績と共に、ミツバチ研究に新しい展開を期待したい。

玉川大学ミツバチ科学研究所から

ベダスカラスブレ氏の来所

アルゼンチン、ブエノス・アイレス国立中央大学のエンリケ・ベダスカラスブレ (Enrique Bedascarrasbure) 農技官が1994年3月14～16日にミツバチ、マルハナバチによる花粉媒介の実情調査のために来所。アルゼンチンでのヒマワリ花粉媒介について意見交換を行うと共に、厚木市のイチゴ栽培農家、平塚市のトマト栽培農家を訪問した。



「養蜂の科学」出版

本号の図書紹介に掲載したように、佐々木正己著による「養蜂の科学」が、(株)サイエンスハウスから昆虫利用科学シリーズ5として出版された。送料込みで1,800円でおわけできる。ご希望の方はミツバチ科学研究所まで。

編集後記

1月9日の研究会には学外から207名と、これまでの最高の参加者を迎えた。現在注目されているマルハナバチ、ニホンミツバチ、プロポリスの講演が行われただけに盛会であった。岡山理科大学三好教授らには、走査電顕による木本類の素晴らしい花粉形態について本誌14巻2号で解説いただいた。本号は木本類に引き続き、草本植物についての寄稿を受け、前号と合わせて日本産蜜源植物の貴重な文献となった。民俗学の立場からこれまで西中国山地周辺などニホンミツバチの伝統的養蜂を研究している宅野氏からは、日本民具学会誌「民具研究」に発表された対馬の養蜂について転載いただいた。対馬の養蜂については、数回にわたり掲載しているが、対馬で伝統的な養蜂を営んでいる一人の養蜂家を追った貴重な記録である。岡田名誉教授からは、被害はそれほど甚大ではないが、ミツバチの外敵として挙げられているニホンミツバチ巣箱内外のクモ類についての論文を掲載することができた。山本氏の寄稿はスイス、ルーマニア、ブラジルと世界を駆け巡ってのプロポリスの生産と利用状況についての報告であるが、紙面の都合で全文を紹介できなかった。松香教授からは7月の第2回アジアAAA会議を迎えるにあたり、熱帯養蜂の現状と問題点をまとめていただいた。研究会全般の様子は相田氏、水谷氏、肥後氏、和田氏の4名の方々から、また図書紹介を井上氏からいただき、各氏にお礼申し上げる。(忠)